

Title	幕末・維新の時期における知識人, その思想と行動 : 福沢諭吉の書簡集を通じてみる
Sub Title	The intelligent people in the era of pre-Meiji restoration, their thought and behavior : reviewing 'collected letters of Fukuzawa Yukichi'
Author	飯田, 鼎(Iida, Kanae)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.1 (2002. 4) ,p.1- 26
JaLC DOI	10.14991/001.20020401-0001
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幕末・維新の時期における知識人、その思想と行動

——福澤諭吉の書簡集を通じてみる——

飯 田 鼎

要 旨

本論文は、『福澤諭吉書簡集』、第一巻に収められている安政四（1857）年から明治九（1876）年までの福澤諭吉の書簡を通じて、彼がその門下生、朋友および知己など、いわゆる「天保の老人」たちとの交友関係、彼らへの福澤の思想的な影響、彼らを取りまく幕末・維新の時代的環境を明らかにするとともに、従来必ずしも明らかにされえなかった福澤の人間性、その強烈な個性に光をあてようとするものである。

キーワード

幕末知識人、天保の老人達、福澤諭吉、幕末・明治の書簡、適塾の友人

一 『福澤諭吉書簡集』の意義

ある思想家の人物や思想について考える場合、まず資料としてあげられるべきものは、自叙伝やあるいは他者による伝記であろう。つぎにその人自身による日記やメモあるいは覚書のようなものが重要である。しかし思想史研究にとって大切に扱われなければならないものは、本人が、友人や知己あるいは肉親などに宛てた書簡であろう。これらはそれぞれその役割と意味を異にすることは云うまでもないが、歴史的な史料という点からすると、自叙伝のもつ意義は比較的軽い。

自伝は、一般に著者が「功成り名遂げて」高齢期に達してから、若い時期を回想して語る場合が多い。そこには過去を懐かしむあまり、ともすれば表現が誇張されたり、記憶ちがいなどもしばしばみられるところである。たとえば『福翁自伝』や、これとならんでわが国の自伝文学の傑作といわれる『河上肇自叙伝』などを読むと、余りにも偏った見方が随所にあらわれる。自伝は社会科学の範疇よりも、むしろ文学の領域に属する。これに比べると、日記や覚書のようなものは、はるかに客観性が高い。それはやはりできるだけ正確に書こうとする意欲をもって記録するからであろう。日記というものは本来、人に読ませるため、あるいは人の眼にふれることを目的に記すものではないといわれる。

しかしながら、なかには後世、読者が現われ、あるいは公刊されることを予期して、克明に日記をつける人も少なくない。たとえば永井荷風がその代表的なひとりで、彼の日記『断腸亭日乗』は、日記である以上にひとつの文学作品である。『福翁自伝』は、伝記文学の傑作であることは疑いないが、しかし彼が1862年、いわゆる文久遣欧使節の一員として書き綴った『西航手帖』および『西航記』は文学であるかといえば、明らかにそれは記録であって文学作品ではない。何故なら福沢はこれらの記事を、ただ自己の覚書として書いたもので、人に読ませるために書いたものではないからである。しかしそれだけに粉飾が加えられていないため、当時のヨーロッパの事情を伝える興味ある史料としての価値を失わない。

では、『自叙伝』には史料的な価値は少ないか、といえば、必ずしもそうとは言い切れない。『フランクリン自伝』を読む者には、アメリカ合衆国草創期の開拓者精神、プロテスタントの禁欲主義、まさにマックス・ヴェーバーの指摘する「資本主義の精神」すなわちピュアリティズムのエートスが、じかに伝わってくるであろう。だがそれにもかかわらず、自伝は文学であるがために、史料としては一定の限界をもっている。ゲーテの『詩と真実』は、その副題に「わが生涯から」と題されているように、自伝であるが、自叙伝にはどうしても詩的な部分が混入するという意味で、こうした題名をつけられたのではなかろうか。

では最後に、書簡、すなわち手紙はどうであろうか。書簡は、いうまでもなく、自分の意思や感情あるいは近況など、あらゆる日常身辺におこるさまざまな事象について、相手に伝える私的な文書である。従って、ある時点で、筆者が手紙を書くとするれば、まず相手が自分の考えや意図を誤解なく読みとれるように努力するのは当然であろう。この場合、手紙に書かれた筆者の思想や感情が、どのようなものであろうと、それは問題ではない。従って書簡は、その時点でのその筆者の感情や思想の表明、あるいは現象の把握そのものを、もっとも端的に吐露しているといっても過言ではない。書簡のもつ史料的価値の重要性はここにある。

2001年、福沢諭吉没後百年を迎えて、慶應義塾は、福澤研究センターを中心に、社団法人福澤諭吉協会の協力をえて、全九巻に及ぶ書簡集を編纂中であるが、筆者は幸いにこれを利用することができ、今回はまず、『書簡集』第一巻の内容に即しつつ、幕末・維新時の福沢をとりまく知識人の思想と行動について考察することとした。

福澤諭吉協会会員鈴木光忠氏の調査によれば、現時点で、福沢書簡は二五〇〇通を超えているといわれる。もっとも多く発見された思想家や詩人および文学者の書簡を、多い順に列記すると、つぎのようになるという。

斎藤茂吉	九三〇三通
田中正造	五〇五〇通
志賀直哉	三三四九通
内村鑑三	二九九〇通

この五名とならんで夏目漱石が二五〇二通（平成八年現在）、福沢書簡も二五〇〇通を上廻ることが
（1）
確実であるといわれる。

しかしこれは発見され蒐集された書簡数で、実際には、はるかに多くの書簡が書かれているわけ
である。故富田正文博士の推測によれば、福沢諭吉はおそらく一万通を超す書簡を認めたであろう
といわれている。今回の書簡集全九巻の内容は、

- 第一巻 安政 四 年十二月～明治 九 年十二月
- 第二巻 明治 十 年 一 月～明治十三年 六 月
- 第三巻 明治十三年 七 月～明治十六年 八 月
- 第四巻 明治十六年 九 月～明治十八年十二月
- 第五巻 明治十九年 一 月～明治二一年 三 月
- 第六巻 明治二一年 四 月～明治二三年十二月
- 第七巻 明治二四年 一 月～明治二七年十二月
- 第八巻 明治二八年 一 月～明治三〇年十二月
- 第九巻 明治三一年一月以降および年未詳書簡

という順序である。

書簡がもつ史料としての重要性は、その本人の生きた時代における活動の範囲によって規定される。福沢諭吉は、幕末から、明治三〇年代まで、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』を頂点とする多彩な啓蒙活動と文明批評を中心に、慶應義塾の創設、交詢社の設立、そして『時事新報』の発刊などを通じて、明治の文明と人心の啓発に決定的な影響を及ぼした。彼が残した書簡は明治の文化遺産であり、その吟味と探求を通じて、われわれは、日本の近現代史に新しい光をあてることになることを確信してやまない。

本書簡集の特色は、編集委員各位の渾身の努力により、各書簡のそれぞれについて説明が加えられ、また各書簡集の巻末に「ひと」および「こと」が、補注として、人物および事項の解説がなされている。また第一巻については、編者の飯田泰三および松崎欣一両氏による懇切な解題が付せられている。

ここでは、第一巻に収められた安政四年から明治九年までの福沢の書簡について、幕末から維新にかけて活躍した福沢とその朋友たちの活動について考察する。この時期は、福沢の『西洋事情』、『学問のすゝめ』および『文明論之概略』という主著が続々と出現し、言論と思想の動向を決定的に支配した時期である。そこにみられるものは、漢学と蘭学の教養的基礎の上に立って、「一身独立」と「一国独立」のために奮闘する姿である。

（1） 鈴木光忠「福沢書簡も漱石書簡も蒐録が二千五百通を越えた」（福澤諭吉協会『福沢手帖』編集部編）。

全九巻に亘る本書簡集を、明治史の流れのなかでその背景を把えた場合、ここで対象とする第一巻は、徳富蘇峰の、いわゆる「天保の老人たち」の活躍の舞台であるのにたいし、第二巻から第四巻まで、すなわち明治十年一月から十八年十二月までの満九年間は、「天保の老人たち」につづく第二世代、福沢の門下生およびその同時代人が登場した時期である。政府はその基礎を固めつつも、内部に幾多の矛盾をはらみながら、問題が噴出し、たとえば、西南戦争、自由民権運動の胎動と明治十四年の政変、松方緊縮財政と農村の疲弊、これにつづく自由党の創設とその急速な崩壊、同時に朝野を震撼した民権派志士たちの騒動と朝鮮の内政問題など、これらの諸問題に触発され、身を挺してその課題に 대응しようとした馬場辰猪、中江兆民、植木枝盛、小野梓あるいは大井憲太郎などの時代である。嘉永および安政年間に生まれ、明治初年に成年に達した彼らは、かつては尊師として仰いでいた福沢をはじめ、「天保の老人たち」との間に、次第に精神的な亀裂を深めていく。

つぎに、第五、六、七巻、すなわち明治十九年一月から明治二七年十二月までの時期、九年間の書簡の背景としては、明治二二年の国会開設に向けての準備期にあたり、自由民権運動の退潮後、不平等条約改正の問題に焦点が移り、急速な資本の本源的蓄積と紡績業を中心とする近代産業の育成の過程で、最初の過剰生産恐慌を体験した日本資本主義は、明治二七年、はじめて大規模な対外戦争、すなわち日清戦争を経験する。

最後に第八、九巻は、最晩年の明治二八年から三一年以降の書簡を内容としているが、書簡集全体を通じて、もっとも興味深く、また重要なのは、第一巻および第二、第三そして第四巻であろう。云うまでもなく、その他の巻の重要性を軽視するという意味ではなく、これら初期の書簡集にこそ、日本の近代化、すなわち明治維新の性格をめぐる福沢とその同時代人、天保の老人たちと明治の青年との間に評価の差異が陰に陽にあらわれているのを感じずからである。そこでここではまず、福沢とその同時代人との関係を、初期の書簡を通じて明らかにしようとするものである。

二 蘭学（洋学）の友との交友——適々斎塾の朋友たち——

福沢の知識人としての出発は、その基礎に漢学の素養があるとはいえ、主として緒方洪庵の適塾での蘭学修業に始まるといえよう。従って冒頭の増田幸助宛の書簡も、適塾での友人を介して、福沢の母、じゅんの父方の従兄弟である増田に、彼の妻の兄、重蔭の次男重石丸の眼病の治療にかんし、医師の紹介を適塾在学の友人に依頼したものであるのも理解できよう。

「然ル処、緒方塾之中、久留米より後藤何某と申者遊学参り居り、同人家は久留米ニて之眼家にて、専ラ蘭法所用、諸国より病客も多く参り居り候よし。若し此方へ共、御越被成候而ハ如何哉と存じ奉り候に付、門人へ添書相頼み指し上げ候間、処書之通り、御出成さ被候ハ、相分り候義も之有る可く、尤も前段申上候塾へ参り居り候何某も、右眼家主人之舎弟ニ候得ば、先方都合も宜しかる可く、先づ彼所ニて暫く御養生成され候上ニ而、御模様次第御登坂思召し、然る可

くと存じ奉候。……」⁽²⁾（文中、筆者の責任において、現代風に読み易いように送り仮名などを付した）。

福沢の郷党の人々にたいする手厚い処置は、これから現われる多くの書簡に共通している。

ところで、つぎの書簡は、安政五年十一月二十二日付であるが、宛名はわからない。

「通坂之節ハ、孰^{いづれの}之罪カハ存じ申さず候へ共、遂に拝眉を得ず、終身ノ遺恨ニ仕り候。小生義も十月中旬、着府仕り、其後^{わづ}微カニ江戸之人物ニも面会仕り候。先日、村田へも相訊ね、折角兄ノ御噂仕候義ニ御座候。村田も此節ハ一寸帰省致し候よしニ御座候。其後、御国元之都合如何ニ御座候哉。事ニ依り御出府ニも相成る可き哉。夫れ而已^{のみ}、相待居り申し候。私も何レ三、四年は滞遊仕り候趣に相成る可く、其の内、一度ハ御目に掛り度き事と存じ候。尚い才ハ、次便ニ申し上ぐ可く候。早⁽³⁾頓首」。

ここで注目すべきことは、福沢が藩命により、江戸に蘭学塾を開くようにとの要請をうけ、江戸に着いたのは、この書簡によれば、「十月中旬着府^{つかまつ}仕り」とあるように、十月半ばであったことは、間違いなからう。福沢は『自伝』のなかで、江戸に着いたときの道中の様子について、「……その時は丁度十月下旬で少々寒かったが、小春の時節、一日も川止めなどという災難^{かわど}に遇はず、滞りなく江戸に着いて……」と語っているが、この点は、編者の解説にもあるとおり、論吉の記憶違いであると思われる。ここで「村田へも相訊ね」とあるのは、適塾の先輩で村田蔵六、のちの大村益次郎のことであろう。

宛名未詳といわれるが、適塾の同僚に宛てられたもので、論吉と余程、親しい関係にあった者であると考えられる。たとえば^{みつくりしゅうへい}箕作秋坪のような人物か。大村と会って噂話をしたというのも興味深い。この当時はまだ福沢は、英語の学習は考えていなかったから、大村益次郎は勿論、「其後^{かす}微カニ江戸之人物ニも面会仕候」という表現のなかには、たとえば將軍の侍医を務めていた蘭学者桂川甫周のような人物も入っていたと思われる。

よく知られているように、福沢は、周囲の身近な人々はもちろん、接触するあらゆる人物に、細かい気配りを怠らない人であった。安政七年、はじめての海外渡航から文久二年、遣欧使節の一員として渡欧するまでの数年間の書簡は、友人、親族、中津藩の上司に宛てられたもので、数こそ少ないが、論吉をとりまく人々との人間関係の濃密さをしみじみと感じさせる。『自伝』のなかに、つぎのような一節がある。江戸築地の奥平藩中屋敷で、蘭学塾を開くようにとの藩命に従い、江戸に赴くこととなった時のことである。

「凡そ藩の公用で勤番するに、私などの身分なれば、道中^{ならび}並に在勤中家来を一人呉れるのが定例で、今度も私の江戸勤番に付て、家来^{ひとりぶり}一人振の金を渡して呉れた⁽⁴⁾……」。

(2) 増田幸助宛、安政四年十二月二日、慶應義塾編『福澤論吉書簡集』第一巻、2001年、5頁。

(3) 宛名未詳、安政五年十一月二日、前掲『書簡集』7頁。

(4) 『福翁自伝』、『全集』第七巻、78頁。

福沢は、家来を雇う代わりに、同じ緒方塾の蘭学書生、岡本周吉、のちの古川節蔵を伴い、中屋敷の長屋で共同生活をするようになった。岡本は、福沢塾最初の門人なり、塾長を務めた人であるが、数奇な運命を辿った。

戊辰戦争のときには、福沢の説得をふり切って榎本艦隊に加わったが、明治二年三月、政府軍に投降した人物で、安政六年十一月五日、岡本七太郎宛書簡は、この節蔵の兄に宛てたもので、弟の学費の仕送りについて猶予を懇願したものである。文面より察するに、江戸での蘭学修業は仕送りが大変で、大阪に帰るよう兄から連絡があった。福澤諭吉全集版の書簡集（第十七巻）には、岡本節蔵自身、兄七太郎に宛てた書簡が掲載されているが、そこには学問修業の困難さと、福沢の懇切な態度が語られている。

「小生事は当時、奥平様の御厄介に相成居申候処、何分一兩年滞留いたし呉れとの事にて中々退塾六ヶ敷、勿論福澤先生は当時江戸にても名高き人にて、尚更小生事も昨年より容易ならぬ御世話に相成り、是非今一兩年は、付き居り度く候得共、何分金子少々御座無く候ては、人の上に立ち又は高位の人と出会い候に、身の風も格別下品にも致されず、……先便も申上候通り寫本などいたし候ては、書物を讀み候ひま御座無く誠に困り入り申候。小生事も昨年以来大分、書物も上達いたし、も早一兩年も学問いたし候へば、岐度役に立つものに相成る可く存ぜ被れ、実に只今は大事なる時にて、又々さゝはり御座候ては誠にをしき事と存じ居り申し候間、何卒先便も申上候通り、当年六両、來年に相成り候はゞ、拾貳両にても又は拾兩なりと、御送り下さ被候はゞ、有り難く奉り候。小生も大望成就の後は、又々御返禮申し上ぐ可き節も之有る可く候間、何卒能々御推察下さ被、早々御返事下さ被可く候」。

苦学の様子が切々と伝わってくる文面である。榎本艦隊に加わり、奮戦した岡本節蔵は、やがて明治二年三月政府軍に投降し、和田倉門内の糾問所に収監され、後に芸州藩邸にひき渡された。注目すべきは彼のその後の行動である。

野村英一氏の研究によれば、福沢門下第一号となった岡本節蔵は、やがて塾長となり、福沢が咸臨丸で渡米するに当たり、翻訳途上であったオランダ人の著作、ブ・ア・デ・ヨング『万国政表』の完成を委ねたほどの人物であった。福沢は、その力量を評価し、下谷の旗本、古川家の一人娘の婿養子に世話してその家を継がせ、節蔵は、幕府海軍士官となった。有能な節蔵は元治元（1864）年、運送艦長崎丸の艦長となった。榎本艦隊より一足早く長崎丸で脱走した古川は、房総館山で、人見勝太郎率いる三百余名の脱走兵を長崎丸に収容、北海道に向かう途中、磐城の小名浜で彼らを上陸させ、榎本軍が立てこもる箱館に辿りついた。その後、明治二年三月、わが国最初の装甲艦「甲鉄」（後に「東」と改称……排水量一、三九〇噸）を旗艦として北上してきた政府軍艦隊を迎え撃

（5） 前掲『書簡集』補注、「ひと」2、356-357頁。

（6） 岡本節蔵から兄七太郎宛書簡、安政六年十一月五日、『福澤諭吉全集』第十七巻、2-3頁所収。

つため、榎本軍は、回天、蟠竜および高雄の三艦を派遣、三月二四日、宮古湾で回天と甲鉄が遭遇した。政府軍の最新鋭艦「甲鉄」にたいして、幕府海軍は旧式であったため、回天が損傷し、戦況不利とみた榎本艦隊は撤退し、回天、蟠竜は箱館に入港した。秋田藩から接収した古川節蔵艦長の高雄は、悪天候と故障に悩まされて、やむなく南部藩の海岸に上陸、古川は、火を放ち艦を焼いて南部藩に投降した。福沢が二回目の渡米の折に同行した小笠原賢蔵とともに、捕虜となって霞ヶ関の芸州藩の屋敷に監禁された。

福沢は、身柄釈放の方策として、政府の仕事に携わらせることが得策であると考え、『英国軍律』の翻訳を思いつき、「旧幕府海軍士官推薦に関する書類」を政府に提出し、そのなかに、訳者として古川節蔵を加えた。⁽⁷⁾この訳業が評価され、旧幕府海軍士官であったという経歴もあり、釈放後海軍兵学寮（後の海軍兵学校）に勤務し、十一等出仕という肩書きで、兵学寮で使用される英国海軍用の各種テキストの翻訳に従事することになった。

古川の海軍兵学寮での勤務は、長くは続かなかっただろう。しかし福沢との交流はその後もつづき、明治三年から五年にかけて、慶應義塾出版社から、小学読本用の啓蒙書などを出したといわれる。古川の強い願望は、ヨーロッパ留学で、機械技術の研鑽のために欧州へ行くことを志し、工部省へ入った。念願が適い、明治六（1873）年大隈重信を事務総裁、佐野常民を副総裁とするウィーン万国博覧会派遣使節の一行に加えられた。ウィーンに着いた古川が、西洋機械文明の発達に驚嘆し、大いに知識欲を満足させたことはいうまでもない。偶然、そこで、津田塾大学の創立者津田梅子の父、津田仙に出会ったことが、古川の生涯の転機となった。津田は農学研究のためにウィーンに滞在していたのだが、彼がクリスチャンであったことが、古川のその後の活動に大きな影響をあたえることとなった。すなわち、キリスト教的な人道主義に感動し、社会事業として、盲人の教育を行うため、訓盲院の設立に努力することとなった。

古川は、福沢の影響の下で、森有礼、西周や中村正直等が設立した明六社に加わり、西欧的な合理主義を身につけ、その上でキリスト教的なヒューマンズムを学び、これを実践にうつすべく、明治八年五月、英国人医師ホールド邸において、ルセラン教会牧師ボルンシャルド、津田仙、中村正直、岸田吟香および古川正雄が集まり、楽善会を組織した。古川は会頭に推され、翌六月、訓盲院の設立認可を申請した。さまざまな経緯をへて、翌九年二月、認可され、同年十二月には皇室から三、〇〇〇円の御下賜金を贈られた。⁽⁸⁾この運動が、わが国において社会事業として先駆的なもので

(7) 野村英一「古川正雄」、福澤論吉協会編『福澤手帖』四二、昭和五九年九月。および伊東弥之助「古川正雄の生涯——慶應義塾初代塾長」『三田詳論』663号（昭和四二年八・九月号）所収、が興味深い。なお、古川についての記述には、『福翁自伝』、『全集』第七巻、195頁、石河幹明『福澤論吉伝』、第一巻、岩波書店、1981年、236頁。また富田正文『考証福澤論吉』上、128-131頁、『慶應義塾百年史』上巻、をみよ。

(8) 岸田吟香『三代言論人集』第一巻、昭和三七年、時事通信社、270-271頁。但し、前掲、野村英一論文掲載のものを引用。

あったことを物語るものであった。

しかしこの訓盲院は、その施設の場所をめぐる困難な事情に直面し、実際の活動としての授業が築地の海軍操練所の敷地で始められたのは、明治十年四月二日、古川の死後、三年近くもたった明治十三年二月のことであったという。

このようにして、適塾での後輩で、後に福沢門下の最初のひとりとなった古川は、武士道の精神を基礎に、西欧的合理主義を身につけ、やがてキリスト教に接してヒューマニズムの精神に燃え、わが国社会事業の先駆者となったのである。福沢門下の異色ある先達として、岡本周蔵、すなわち古川正雄の名は長く記憶するに値しよう。

いまひとり、適塾の同僚で長く交友関係を保った人として、山口良蔵をあげることができる。山口宛書簡は、慶応元（1865）年四月二十八日のものに始まり、明治七年（カ？）十月四日付に至る期間、二十通を数えられる。

西川俊作氏の「山口良蔵覚書」によれば、二五通にのぼるといわれる⁽⁹⁾。福沢諭吉は、明治二十年五月二十日付と記されている「山口良蔵遺族宛書簡」のなかで、「御手紙拜見仕候。良蔵様御事御病症次第に御差重り、本日廿日遂に御長逝の由、誠に絶言語驚き入候次第、皆々様御愁傷の段深奉察候。……」と書いている。

適塾での同輩とはいえ、岡本節蔵（古川正雄）の場合は、福沢とはいわば師弟関係であったのたいし、山口良蔵は、蘭学の学習にともにいそしむ同僚として、特別に親しい関係を結んだことが、書簡によく現われている。福沢諭吉の適塾入門は、「適々齊塾姓名録」によれば、安政二年三月九日⁽¹⁰⁾で、良哉（良蔵の別名）の入門はこれより一年後の安政三丙辰仲春朔日」となっている。良蔵の生年を天保九（1838）年として、諭吉より四歳下である。良蔵の入門時、諭吉は二一歳であったから、彼はまだ十七歳だったということになる。諭吉は、『自伝』のなかで、「莫逆の友なし」と唖叫をきっているが、それにもかかわらず、山口は諭吉が心を許した数少ない友人のひとりではなかったか。

適塾での修業ののちの山口の経歴はさだかではない。明治二年二月、和歌山藩洋学所助教の身分を得た。福沢との文通が頻繁となるのは、その数年前の慶応元年四月二十八日付、福沢の山口宛書簡からである。この頃、すなわち一年前の元治元（1864）年、三月二十三日、福沢は、江戸をたって中津に帰省、滞在約二ヶ月の後、小幡篤次郎ほか六人の青年を伴って、六月二十六日に帰京、十月幕府に召し抱えられ、外国方翻訳局に出仕することになった。慶応二（1866）年、『西洋事情初編』に始まる福沢の言論出版活動が盛んになる前年のこの書簡は、後に政府の経済政策に貢献した若山儀一についてふれられていることは、興味深い。

(9) 福澤諭吉協会編『福澤諭吉年鑑』27, 2000（平成十二）年、所収。

(10) 緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店、1977年、255頁。

「^{いつかん}一翰呈上仕候。向暑之節御座候所、^{おそろいにてますますごけんあんござなされかしたてまつり}御揃益御健安被成御座奉賀候。……先達ハ貴翰被下難有拜見。ローゼ御翻訳も追々御成業相成候に付ては、^{とうおもて}当表へ御廻し可相成、開成所に指出、上木願の義取計可申旨、^{おんつかいなされ}安き御用ニ御座候。御草稿御遣被成候得ば、直ニ開成所掛之者へ托し、⁽¹¹⁾早々相済候様可致奉存候」。

文中、「ローゼ御翻訳」とあるのは、ドイツ人ローゼ (T.A.G. Roose) が、ドイツ語で書いた人体生理書を、エイプマ (M.S. Ypma) が、オランダ語に訳して Handboek der Naturkunde van den Mensch と名づけて1809年に出版したものを、⁽¹²⁾ 洪庵が翻訳して、『人身窮理学小解』と題したもので、写本によって当時広く読まれた。この書簡は、師緒方洪庵が、文久三 (1863) 年六月十日、下谷御徒町医学所頭取屋敷で、突然、大咯血をおこし、五四歳で急死したあと、山口良蔵は恩師洪庵苦心の邦訳書の出版を志し、その相談を福沢にもちかけたものにたいする返書である。但し解説によれば、「山口がその改訳をこころみたものか、これを仕上げ、刊行となったかはよくわからない」という。

つぎに、中津からの帰途、大坂でお世話になったことの礼をのべたあとに、つぎのように書いている。

「緒方精哉氏、^{おもて}昨冬当表より乗船出帆之所、難船、八丈島へ漂着之由にて、先日^{ふたたび}再江戸へ帰り、此度帰坂致候。委細当方之義御承知可被下候」。

この緒方精哉という人物は、「解説」によれば、天保十三年生まれで、江戸の医家西川宗庵の子である。適塾の「姓名録」によれば、「東都浅草 廣小路 西川元正」とあり、嘉永三年の入門となっている。⁽¹³⁾ これは後の経済学者で、大島貞益とならんで有力な保護貿易の主唱者となった若山儀一のことである。若き日の若山儀一の名前が、何故、この福沢の書簡に現われたのであろうか。住谷悦治教授の名著『日本経済学史』によれば、⁽¹⁴⁾ 適塾入門後、名前を緒方正と改め、医学および蘭学研究のために長崎に遊学、明治元年、開成所三等教授として英人教師パーレイに師事、フルベッキに従い経済学を研究し、『官版経済原論』を訳了し、つづいて『泰西農学』、『西洋開拓新説』、『西洋水利新説』などを訳出し、社会科学の普及につくしたが、明治四年、若倉遣欧使節団の一員として欧米各国を歴訪した。若山は米国で、大蔵卿大久保利通から、「⁽¹⁵⁾ 税務並びに国家経済の方法取調に従事すべき旨」を命じられ、明治七年帰国し、大蔵省に出仕し、有数の財政通となった。

住谷教授は、「第五章 若山儀一と大島貞益——保護貿易論の紹介と主張」という一節を設け、大島貞益と並ぶこの有数の保護貿易論者の主張を紹介しておられる。すなわち、若山儀一は、神田

(11) 山口良哉宛 (良蔵の別名)、慶応元年四月二八日、前掲『書簡集』40-42頁。

(12) 緒方富雄、前掲書、29頁。

(13) 前掲、222頁。

(14) 前掲『書簡集』42頁。

(15) 住谷悦治『日本経済学史』ミネルヴァ書房、1958年、92頁以下。

孝平、福沢諭吉、加藤祐一、津田真道、田口鼎軒等とともに、西洋経済学説の紹介・移入の先駆者として一般に認められているが、しかし他の先覚者に比較すると、必ずしも高い評価をうけているとはいえない、といわれる。要するに、彼は、後進国日本が、資本主義制度の導入を迫られている以上、必然的に自由主義的啓蒙主義的な政策の採用が必要とされる反面、同時に保護政策をも実施しなければならぬと主張した。その論拠は、イギリス人バイルス（あなさがし）の『自由貿易の詭説』(J.B. Byles, *Sophism of Free Trade and Popular Political Economy Examined*, 1849) を、『自由交易穴探』という表題で翻訳したことによっている。

この若山儀一の業績は、堀経夫教授によって、その『明治経済思想史』のなかでも高く評価(16)され、その後、杉原四郎教授は、大山敷太郎による『若山儀一全集』(全二巻、東洋経済新報、1940年)によりつつ、紹介され、評価されている。(17)ところで福沢は、山口良蔵宛書簡のなかで、何故、ことさらに若山儀一にふれているのであろうか。文面によれば、緒方精哉、すなわち後の若山儀一は、慶応元年冬、江戸を出て大坂に向かおうとしたところ、何らかの海難事故のため八丈島に漂着し、再び江戸に帰り、この度、大坂に到着した旨、知らせているのである。彼は天保十三年生まれで福沢より八歳ほど若い、適塾への入門は福沢より大分早い。嘉永三(1850)年「東都浅草広小路西川元正」となっている。

緒方姓を名乗るようになったのは、慶応三(1867)年、洪庵(こへよし)の次男惟準(18)(通称洪哉)の義弟になったからであるといわれている。師洪庵の縁者で、かつて適塾生であったので、福沢と田知の仲であったとも思われる。しかし明治に入るや、緒方精哉は埼玉県下戸室村の若山家養子となり、若山(のりか)儀一と改め、明治四年十月、岩倉使節団に随行して税制調査に従事し、官僚の生活に入った。注目すべきことは、この若山が、今日云うところの官庁エコノミストに甘んずることなく、経済学者として、自由主義者福沢に対抗する保護貿易論者として活躍したことである。その後の交流については明らかではない。

山口との文通は、ごく親しい間柄だっただけに、近況報告として幕府に召し出され、外国奉行支配調役翻訳御用を仰せつけられたことや、興味深いのは、「此節江戸ハ英学余程相開け、先ツ初学横文を學候ものニ、蘭書を讀候ものハごぎなまくらいのこと無御座位之事ニ御座候。思召立ハ如何や。格別むつかしま六ヶ敷ものニも無之候」。英語学習に躊躇する友人に、英語の学習を奨めている姿が想像されよう。

これ以後、明治七年十月四日までに山口良蔵宛の福沢書簡は、十七通に及ぶが、その主な内容は、ひとつは、福沢諭吉の著作についての大坂を中心として関西地方に拡がった偽版問題の処理と、つぎに幕末・維新の動乱のなかで生活の基盤を失った士族階級が、貧困におちいった結果、慶應義塾

(16) 堀経夫『明治思想史』日本経済評論社、1991年、197-206頁。

(17) 杉原四郎『近代日本経済思想文献抄』日本経済評論社、1980年、283頁。

(18) 前掲『書簡集』42頁。(注)参照。

の塾生数も激減し、また貧しい塾生が増加してしばしば経営の危機に直面するという深刻な事直について訴え、相談をかけるという書簡が主流を成している。なかでも大阪を中心に行われた著作の偽版については、悩みの種であった。

福沢自身、明治三十年十二月出版の『福澤全集緒言』のなかで、「西洋事情は、余が著譯中最も廣く世に行はれ最も能く人の目に觸れたる書にして、其初編の如き著者の手より發賣したる部数も十五萬部に下らず、之に加ふるに當時上方辺流行の偽版を以てすれば、二十萬乃至二十五萬部は間違(19)いなる可し」とのべているように、そのベストセラーぶりをうかがうことができる。しかしこの偽版問題は、著者の利益と権利の侵害であるのみならず、著作権の確立という重大な法律問題を、福沢に深刻に意識させることになった点で、きわめて重要である。(20)

さて、この偽版問題の処理および解決を山口良蔵に依頼した書簡であるが、慶応四年閏四月十日付書簡のなかに、つぎのような指摘がみられる。

一、西洋事情、大坂ニ而ばかり式百部斗チャーフチャーフ一に相成、天災なり。(チャーフは、chaff……糶殻から転じて、屑の意……引用者)

一、此度上方ニて、旅案内重版のミならず、西洋事情之偽物も出来候よし。十一国記も同断。これハ醍醐院様之御蔵版ニて、御賣弘相成候趣、在京之朋友より申參候。偽版之義ハ、西洋各国ニても嚴禁ニて、コピライトなどもうす杯申法律有之義。然るニ上方ニては、少しも差さしかま構なく、野鄙之輩やひのやからただ唯利是求、己レ人之りをこれもとめ簪かんざしを奪い、己レ無知ニして人之知識を盗む。斯る形勢ニては、小生も著述之商売ハ先みあわせツ見合、他ニ活計之道もどもうすべし求可申と覚悟いたし居候。此一事ハ小生老人之迷惑のミならず、天下之著述家ことごと尽く心を動かし、各々筆を閑し、文運の一大却歩可相成と、窃ひそかニ歎息致候事ニ御座候。(21)

この文面をみると、当時、幕府断末魔の時期にあたり、前途きわめて不透明な日本の情勢におされて、『西洋事情』をはじめ、『西洋旅案内』や『条約十一国記』などが、飛ぶように売れたらしく、そこで関西での偽版の登場となった。注目すべきことは、この偽版のいわば版元ともいべきものが、「醍醐院様」であった。おそらくこれは、真言宗醍醐派の総本山醍醐寺で、奇妙なことに憎むべき偽版にたいして、「御蔵版」と敬意を表していることである。当時の福沢にとっては、利益のみ唯、追求する「野鄙の輩」ではあっても、実に厄介な相手であったことは想像がつく。

ヨーロッパでは、著作権コピーライトと称して、著者の権利が法律によって保護され、その侵害は犯罪とみなされているのに、わが国では偽版が堂々と罷り通るという状態で、さすがの福沢も、「他ニ活計之道を求め申す可く」と慨嘆させたほどであった。福沢はやがて著作権確立運動に立ち上がるのだが、

(19) 慶應義塾編『福澤論吉全集』第一巻、1958年、福澤全集緒言、26頁。

(20) 河北展生「福澤論吉の初期の著作権確立運動」、慶應義塾、福澤研究センター編『近代日本研究』5、1989年、所収。

(21) 山口良蔵宛、慶応四年閏四月十日付、前掲『書簡集』90-94頁。

さしあたり、この問題の処理について、山口への依頼を書き送った内容は、きわめて現実的な案であった。当時、福沢は、『西洋事情外篇』三冊を印刷中で、此の書売り出せば必ず偽版が出ることは必定、そこで、版木も焼き捨てようとも考えたが、「折角天下有益之書」として高い評価をうけているものを、人々に示さずに終わるというのも残念であり、また慶應義塾の新築のため、およそ千両ほどの借金があった。そこで何とかして償わなければならない。結局、上方の者に売り払うことを考えたのである。すなわち、以下のような原価計算を行う。

- 一、千両 版木草稿代金
- 一、七百五拾両 三千部製本料
 - 壹部ニ付壹歩
 - ノ千七百五拾両
- 一、貳千貳百五拾両 三千部代金
 - 壹部ニ付定価三歩
 - 内 四百五拾両 書林に渡し 二割引
 - 残 千八百両

福沢の計算によれば、版木代および製本に要する費用を合算して千七百五拾両が原価で、それを書店に書籍三千部代金壹部に付き定価三歩として二割引きでひき渡した場合、千八百両であるから、差額として五拾両が買主の利得となり、その後は版を重ねる毎に利益は増加する。この取引は、いわば清水の舞台から飛び降りるほどの決心を要するが、「余程之損に相成候得共、江戸ニ居て上方之偽版を防ぐに術なし」ということで、異常の決意をしたというわけである。だが柔軟な思考を得意とする福沢は、別の方法として上方でその製本を買おうとする者があれば、勿論それでも結構、「二千部一時に購入希望」ならば、三割引きで売り渡すが、それ以外では取引しない。現金ひき替えてない場合は、即金として貳百両、一ヶ月後ならば又貳百両、七月十五日、いわゆる中元を期として清算をするという計算方法で、問題の解決を、山口にはかっている。福沢の以上二つの提案は、堅い覚悟の上で行われたもので、もし関西側との取引がこれらのうちのいずれかで整わない場合は、「書物ハ仮令彫刻出来候とも、壹部も出し不申、時宜ニ依り板木焼棄、著述之業ハ天下太平に至るまで見合候積ニ御座候。何卒御心当之筋ニ御相談可被下候。」と覚悟の程を示している。⁽²²⁾

『西洋事情外篇』の発刊を契機として、福沢を悩ませた偽版問題は、結局、山口の努力により、解決の緒を見出す。明治元年十二月八日付の書簡によれば、芝神明前の岡田嘉七方（尚古堂）から、『外篇』は発刊されることになった。ところが、岡田屋の手代喜兵なる者の云うところによれば、大坂の商人河内屋某が、大坂の裁判所に、その『西洋事情外篇』の重版をしたい旨願ひ出たということを知り、福沢は驚き呆れて、

(22) これについては、長尾正憲『福澤屋論吉の研究』思文閣、1988年、に詳しい叙述がある。

「扱々々不思議ナルカナ。盜賊之免許を願ふも同様。^{しかしながら}乍併時之模様ニ由り、如何様之儀出来候も難計、^{はかりがたく}可然御心添被下候様、呉々も奉願候。⁽²³⁾」

と書いて山口に送っている。ただ幕府倒壊前の混迷の時代を、やや脱したという感慨が明治に入ってみられたらしく、慶應義塾にも明るい兆候が感じられた。

「此節尊藩之景況如何々々。嗚々尊兄ニも御多用之義奉察候。先日松山氏帰国、委細当処の模様、御聞取可被下候。慶應義塾も追々繁昌。讀書商賣誠に安気ニ御座候。何卒紀州様も二十才以下の若年輩を追出し、洋学執業可然奉存候。」

これをわずか半年前の六月七日付書簡が、前途容易ならぬ情勢を示唆しているのをみればまことに象徴的である。

五月十五日、忘れがたいウェーランド英書講述の日、砲声殷々たるなかで「この義塾のある限り、日本は文明国である」と喝破した日から一ヶ月も経っていない六月七日の山口宛書簡は、以下のようにのべられている。

「洋書相達し候よし、何卒御勉強奉祈候。小生義も此節ハ全く閉戸、一步も外出不致、⁽²⁴⁾讀書翻訳ニ従事いたし居候。」

つづいて、偽版が流行して困却、折角翻訳や著作をしても忽ちにして偽版が現われる現状を憂え、出版しようとしても偽版のために果さず、「折角の訳書もにぎりつぶしなり。^{すべ}都て天下の文運ハ大却歩ニ可及、……讀書之沙汰ハ絶テなし」という嘆かわしい状態がつづくかに思われたのであった。

しかし、やがて明治政権が、薩摩長州をはじめとする藩閥政府ではあっても、攘夷を唱える頑固者の集団ではなく、外国との交際を重んずる開明的な政権であることが判明して、福沢は愁眉をひらき、『学問のすゝめ』につづいて『文明論之概略』など、旺盛な執筆活動に入る。

適塾の出身者ではないが、岡本節蔵（古川正雄）や山口良蔵とならんで、松山棟庵もまた福沢と密接な関係にあった重要な人物である。天保十（1839）年、紀州藩医の子として生まれた松山は、紀州出身者として、山口良蔵とも親しく、アメリカ人の医師ヘボンの指導をうけ、チフスの研究で成果をあげ、慶應義塾の教育にも協力した。福沢家の家庭医も務め、終生、医師として貢献し、現在の慈恵医大病院の前身である有志共立東京病院を、高木兼寛らと協力して成医会を創立したことも知られている。⁽²⁵⁾

福沢が、この松山に宛てた明治二年二月二十日付の書簡は、洋学による教育をもって文明開化を方針とする和歌山藩が、洋学校を創設して福沢を招聘しようとする案にたいし、これを断り、時あたかも文明開化に向かうかにみえる時世を迎えて、自己の学問と人生観を語ったものとして興味深

(23) 山口良蔵宛、明治元年十二月八日、前掲『書簡集』110-112頁。

(24) 山口良蔵宛、慶応四年六月七日、前掲『書簡集』100-103頁。

(25) 松山棟庵と福沢および慶應義塾との関係については、土屋雅春『医者のみた福澤諭吉——先生、ミイラとなって昭和に出現』中公新書、1996年、205-208頁をみよ。

い。

「扱此度御内談の学校一条、浜口氏御談御企業候趣、誠に御盛挙美事、人間の急務これに過ぐるものなかるべし。」

「御内談の学校一条」とは、洋学校設立のことで、以下に記したことは、西洋文明を迎え入れるときの心構えを説いたものである。まず紀州の人々の風俗の美点と短所とをつぎのようにのべ、容赦ない批判も浴びせている。

「僕敢て貴国へ対し、ゴマをスルにあらざれども、これまで諸国の人に交るに、人気の穩にして自ら自由寛大の風を存し候は、紀人に限り候様有之候。唯欠点は文教薄うして頼む所なきゆゑ、他の真似計まねばかりに志し、警へば調練をすれば直に筒袖だん袋、公議附合すれば直にジャンギリ、飲むものは洋酒、管なむるものはポートル、今一等を下れば乱暴悪書生の真似をいたし、高下駄大小、湯屋にて詩を吟じ茶屋にて女にからかう杯本来などの天稟になき所業わざを態と勉めて真似するの風なり。」

この文章は、紀州に限らず、当時の青年一般の風潮を描写したものと思われるが、しかしこの弊風は、紀州においてとくに甚だしいとのべている一節は、まことに辛辣である。

「此様子を以て考ふるに、人殺の仲間に入らば人殺の真似をも可致、此悪弊は独り紀州に限らず、天下皆然り。然りと雖も紀州人はその甚しきもの歟と愚察(26)仕候。」

おそらくこのような表現の背後には、当時の慶應義塾に学ぶ多くの青年達の生態を観察した福沢の鋭い洞察があるが、思うに福沢の胸中には、このようないわば田舎風の人情風俗のなかで、洋学教育を推しすすめるとすれば、その前提として基礎教育の充実こそが重要であるという感慨が浮かんだにちがいない。そこで、つぎのような三ヶ条を提示する。第一、文化の域を窺ったことのない未開の民に、洋学塾は無用、第二、支那日本の文字すら十分に読むことのできない人に、急に横文字の教育は無理、第三、窮理書を学んで学校を出た者は、三十両、五十両の給料を取ることを望み、江戸、大坂などを最上と思い、田舎は大抵御免と申す青年が大部分である。そこで、論語の代わりに窮理図解や日本の国尽を手本にして「文字を覚え従って義理を解する様の仕掛にすること」、すなわち、「只管ひたすらコンモン、エヂュケーションに心を用ひ、次第に人を導く様いたし度」、そのうち或は原書を読む者も現われるであろう、という。

この書簡の要点は、いわゆる欧化思想を性急に教え込むことには批判的で、むしろ普通教育の重要性を力説していることである。

「兎角、原書々と喧敷やかましく唱へざる方可然哉と存候。先づ我輩の期する所は、紀州全国の人に世界の円きと聞きて怪む者なく、警へば拙著十一国記（原文は「記」を脱落）の中に記せる位的事は、天神講に出席する子供の常談にも互に皆相話し、我が日本国は世界中の一國にて、政の体裁には外国の某の国に比すれば如何、その国の君に比すれば我国の天子は何の如きもの、我国の諸

(26) 松山棟庵宛，明治二年二月二十日、『書簡集』112-116頁参照。

侯は西洋封建時代の何に当る抔と、大抵胸算用の出来候までにいたし度き事なり。是等の箇条をよく々々相考へ候はゞ、必ずしも横文の書を讀まずとも出来可申、さ様候へば人の無知なるは必ず横文なきゆゑに^{ひつきょう}あらず、畢竟^{ひつきょう}文学の方向を誤り文味を重んぜざるの罪なり。……」。

この文章の最後の部分は、書物の奴隸にもひとしい漢学者の態度を批判するもので、「……僅に数十巻の書を数百度も繰返し、所得は唯スレーブの一義のみ。其一身を売奴の如く処しながら、何として其国を独立せしむべきや、何として天下の独立を謀る可きや」。

この書簡は、明治二年初頭に書かれているが、つぎにのべる当時の福沢の心境は示唆的である。

「小生敢て云ふ、一身独立して一家独立、一家独立一国独立天下独立と。其の一身を独立せしむるは、他なし、先づ知識を開くなり。其の知識を開くには必ず西洋の書を讀まざるべからず、其の洋書を讀むには先づ文を以て人を化すべし、其の文を以て人を化するには事を易くし及ぶ所を広くすべし。故に翻訳書を多くし、手習師匠を其儘改革して、事々物々朝夕暮暮の話しに天地万物世界諸国の事を自然に知る様致度義に御座候。」

ここにはすでに、やがて明治五年、『学問のすゝめ』となって現われる啓蒙家福沢諭吉の出現、そしてさらに明治八年『文明論之概略』によって、文明批評家としての地位を確立するに至る福沢の面目躍如たるものがある。

以上のように福沢は、慶応の末年から明治初年にかけて、偽版問題を中心に、洋学を普及させるための初等教育の重要性を、紀伊藩出身の山口良蔵や山口棟庵に宛てて書いている。紀伊藩は、中津藩および長岡藩とならんで、慶應義塾にもっとも多くの学生をおくっていただけに、福沢の期待も大きく、慶応四年、山口に宛てて偽版問題の決着を依頼する書簡の末尾にあたってのべられている決意と抱負は興味深い。

「一 天下は太平ならざるも、生之^は一身ハ太平無事なり。兼て愚論申上候通り、人ニ知識なければ固より国を治ること能はず。^{はなはだしき}甚に至ては、国を乱タルニも規則なし。皆無知文盲之致す所なり」⁽²⁷⁾。

この簡潔な文章の背後に秘められているものは、当時、幕府寄りであった福沢が、維新政府を目指す薩長連合軍を信頼できず、戊辰戦争を冷やかな眼で眺めていたことである。すでに芝新銭座に新校舎を落成、慶應義塾を名実ともに日本一の学塾たらしめようとする意欲は、つぎの文言から読みとることができる。

「僕は学校之先生ニあらず、生徒ハ僕之門人ニあらず。之を総称して一社中と^{なづ}名け、僕は社頭之職掌相勤、讀書ハ勿論眠食之世話、塵芥之始末まで周旋、某余之社中ニも各々其職分あり」。福沢と塾生たちとの間柄は、いわゆる師匠と門人との関係ではなく、慶應義塾社中における年輩者と年少者との協力関係、上下の差別なく、相互に教え合うという伝統の形成が、この時期に始まっ

(27) 山口良蔵宛、慶応四年閏四月十日、『書簡集』92-94頁。

たことを窺わせる一節である。福沢は同時に山口にたいし、和歌山出身の青年たちの「田舎風」を批判しながら、彼らが慶應義塾の将来を担う人材であることをも認めている。

「尊藩之人ニて在塾の面々ハ、当時松山、小泉、草郷、辻村、小川、吉田六名ナリ。松山之上達ハ格別、小泉杯も頼母しき品物。一兩年之内ニは、一人物たること請合なり。」⁽²⁸⁾

以上適塾出身者を中心に、福沢と密接な交友関係を結んだ知識人を考察したが、つぎに、やや時代をさかのぼり、福沢が英学を志すなかで、三度にわたる外国渡航の体験を通じて交流を深めた人物像について考察しよう。

三 危機の時代——幕末・維新の時期における武士道と友情そして文明

福沢の三度の外国体験は、文字通り彼の世界観に決定的な影響をあたえた。なかでも、最初のアメリカ合衆国への渡航は、咸臨丸でのさまざまな見聞やアメリカ大陸およびハワイなどでの外国人との接触を通じて、ヨーロッパの文明と社会の実像にふれ、封建体制の矛盾が極度にたかまった幕末日本と、青年期のアメリカ資本主義の支柱ともいべき市民社会との差異に驚嘆したことは、⁽²⁹⁾『福翁自伝』を読んだ人ならば、実感するところであろう。

しかしそこで遭遇した外国人は、いわばゆきずりの人々であり、あるいは職務上接触した要人であったが、『書簡集』にしばしば登場するフランス人の日本研究者レオン・ド・ロニ (Leon de Rony) は例外で、福沢はロニーとかなり深い交友関係を結んだばかりか、ヨーロッパ文明について、何程か深い示唆をうけたことは、その『西航記』や『西航手帖』の記述をみても明らかである。1860年代のヨーロッパ人にとっては、来日したことのある外交官やごく限られた一部の人以上には、日本はまったく未知の国であった。従って十六世紀以来二五〇年以上にわたって鎖国をしていた日本および日本人にたいして、ヨーロッパ人が、殊更強い関心を示したことは至極当然であった。福沢もその一員として加わった二度目の外国派遣、すなわち文久遣欧使節については、当時のロンドン・タイムズ記者が、日本使節団のマルタ島上陸以後の動静を、逐一、紙上で紹介しているほどである。筆者はこれについて、かつてふれたことがある。⁽³⁰⁾しかし、ロニは日本人にたいする関心は、たんにジャーナリスト的な興味ではなく、いわば学問的で言語学的な、あるいはひろく文化的な領域に及び、今日、云うところのジャパノロジー (Japanology) に関して、先駆的な貢献をしたひとりであった。

(28) 前掲『書簡』93頁。

(29) これについては、山口一男『福澤諭吉の亜米利加体験』1986年、福澤諭吉協会、を参照されたい。

(30) 拙著『英国外交官の見た幕末日本』吉川弘文館、1995年。および拙著作集第五巻『福澤諭吉研究——福澤諭吉と幕末維新の群像』御茶の水書房、2001年、をみよ。

いうまでもなく、いわゆる日本学の研究として、幕藩体制下の日本に駐在したオランダ商館長付のケンペル (Engelbert Kämpfer)、トゥーンベルク (Carl Peter Thunberg)、そしてシーボルト (Philip Franz von Siebold) をはじめ、国交が開かれた後は初代駐日イギリス公使、ラザフォード・オルコック (Rutherford Alcock) やハリリー・パークス (Harry Parkes) そしてアーネスト・サトウ (Ernest Satow) を中心に、アストン (William George Aston) およびチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) 等により、日本研究がおしすすめられ、1872 (明治五) 年、日本アジア協会が設立された。⁽³¹⁾

福沢が親交を結んだロニは、こうしたイギリスを中心とするジャパノロジーの動向とは、関係はないようであるが、フランスにおける日本学の先駆者であったことは疑いない。

文久二年八月三十日 (1862年9月23日) 付書簡は、福沢諭吉、箕作秋坪、松木弘安、川崎道民、太田源三郎の五名の名前で、パリのグランド・ホテルからロニに、つぎのような短い文面の手紙が送られている。

羅尼君え

私共昨日此ノ京ニ着キマシタ。君ハ御機嫌ヨキヤ。速ニ御目ニカ、リタクアリマス。御暇ナラハ私ドモノ旅宿へ御出ヲ願ヒマス。⁽³²⁾ 敬白。

ロニについて、もっともくわしく記録しているのは、福沢の『西航記』および『西航手帖』である。文久二年三月十九日のところに、

「佛蘭西の人『ロニ』なる者あり。支那語を學び又よく日本語を言ふ。時に旅館に來り談話時を移す。本日語次、魯西亜のことに及び、『ロニ』云、去年魯西亜の軍艦對馬に至り、已に其全島を取れりと聞けり。信なりやと。余其浮説なることを説辨せしに、翌日新聞紙を持來り、昨日の話、魯西亜の對馬を取りたるは全く虚説なることを此紙に記して世上に布告したりと云へり」と記されている。

また、閏八月十一日夜、ロニの話として、ロシアによって領土割譲を迫られるスウェーデンやこれを助けようとするフランス、一方プロイセンは、デンマークの一部を占領しようとするなど、ヨーロッパ諸国の情勢についてのニュースを伝えている。ロニについて詳細な研究を発表しておられる松原秀一教授によれば、ロニは1837年生まれで、福沢より二歳若い。日本使節のフランス訪問にあたり、通訳官となり、1863年、パリの東洋語学校において、日本語講座を開くことを許可された。1868年には、初代日本語教授となり、1914年に死去している。松原教授の研究によれば、かつて日本についてヨーロッパに紹介したフランツ・フォン・シーボルトは、ライデン大学において、『四体千字文』(四通りの仮名文字、片仮名二体、平仮名二体)の翻刻を行い、そのほか『日本王代一

(31) これについては、楠家重敏『日本アジア協会の研究』日本図書刊行会、1997年、が興味深い。

(32) 前掲『書簡集』25-26頁。

覧』、『書言字考』などを出版した。ロニは、これらを参考に1858年に、『ジュルナル・アジアティック』誌に、「日本語の辞書とその定義の性質についての諸考察」(Remarques sur quelques dictionnaires japonais, et sur la nature des explications qu'ils renferment) という二〇頁程の論文を発表、そのなかで、「いろは順」、乾坤門、時候門、神祇門、官位門、人倫門、肢体門、気形門といった分類法、同義字の並べ方を解説し、薄伽、梵、菩薩などの仏教語には、サンスクリット(梵語)で書き加えている、という(拙著作集、第五巻『福沢論吉研究』260-262頁参照)。

ロニの日本語研究にたいする貢献は、さらに1859年には、アムステルダムで、『日本語の読み方』を出版、1860年には、『蘭日薬語集』について(Notice d'un vocabulaire pharmaceutique)、さらに1861年には、ゴシュキエヴィッチの『日露辞典の書評』(Rapport sur la Dictionnaire japonais-russe de M. Gochkievitch)をペテルスブルクで出版した。松原氏はさらにロニの行動について、1861年四月から翌年末迄、この年に創刊された『ル・タン』紙の常勤の編集員を務めていたことをのべておられるが、この事実は、さきに引用した福沢の『西航記』の記事のなかで、話題がロシアに及んだとき、ロニが、対馬はすでにロシアに占領されたと聞いているが、それは信用できるかどうかと訊ねたのにたいし、福沢は、それはあてにならぬ噂、つまり浮説だと答えると、ロニはすぐさま翌日の新聞に、訂正記事を出した新聞をもってきて示したと符合する。

しかし周知のように、ロシア軍艦による対馬占領の噂は浮説ではなく、1861年三月以来、ロシア軍艦パサドニック('Passadnick')が対馬に碇泊して、上陸を試みて日本側の抵抗に遭い、発砲して日本人ひとりが殺害されるという事件がおこっていた。対馬侯は、機会ある毎に退去を要求するが応ぜず、八月十八日には府中に到着、二十日には対馬を一周して測量を行ったと伝えられた。結局、ロシア艦は、英国の強い退去命令により対馬を退去するが、ともあれ、ロニは、日本人使節にとって、まことに親切な情報提供者であったろう。日本の使節にたいして親切なロニについては、たとえば『西航記』の三月二八日のところに、『『ロニ』と共に薬園に至る』と記されている。福沢は、珍しい草木や小鳥、植物や昆虫、さらに鉱物なども展示されているジャルダン・デ・プラント、すなわち植物園と動物園および博物館を兼ねたようなところに案内されたわけである。このロニにたいして、使節のメンバーは好意をもち、福沢も書簡を交換している。

このロニの日本使節にたいする関心の深さは、たとえば、使節一行がフランスからイギリスへ渡ったあと、イギリスからオランダへ入った頃、五月十七日にオランダに到着している。二四日、福沢の記すところでは「ロニ巴理より来る」とあるが、要するに日本使節に会いたくしてはるばるパリから、使節が逗留していたハーグにまでやってきたのである。福沢は感謝の情をこめながら、所用のためすぐには会えない旨を、文久二年五月二十一日(1862年6月18日)付書簡のなかで、つぎのように書いている。

(33) この経緯については、前掲『英国外交官の見た幕末日本』122頁を参照。

「先日ヨリ度々貴翰ヲ送ラレ、難有存シマス。今日コノ京^{ミヤコ}へ御着^{オツキ}ノヨシ、私ドモニ於テ甚^{ハナハ}ダヨ
ロコビマス。何卒少シモ早く御目ニカ^観リ [タク] 存シマス。私アナタノ家ニマイリタク存シマ
スケレドモ、色々用事アリテマイルコトアタワズ、甚^{ザンネン}ダ残念ニ存マス。謹言。⁽³⁴⁾
イロ sorry

日本語に熟達しているとはみえないロニのために、できるだけ平易な表現を用い、ルビをふるな
どして、福沢は細かい気くばりを示している。

ロニはそれから六月十三日まで一行とともにオランダに滞在したが、母親病気の報に接し、一旦、
フランスに帰った。しかし彼は再び日本使節と会いたくなくなったと見え、またベルリンまで来たが、
すでに出発してしまった後で会えず、やむなくペテルブルクまで来て、一行に会っている。こうし
たロニの行動は、福沢をはじめ使節一行に深い感銘をあたえた。「別林より伯徳祿堡までの道程八
百里。火輪車にて此鐵路を來るに入費四百フランク。唯余輩を見ん爲めに來る。欧羅巴の一奇士と
云ふべし」⁽³⁵⁾と福沢は書いている。このようなロニの行動にたいして、福沢はもちろん他の人々も、
えもいわぬ感動を催したであろうと思われる。

ペテルスブルクでの感激の対面を果たした後、福沢はロニに、帰途パリでの再会を約し、つぎの
ように親友としてのエールを送っている。

「ベルリンヨリノ貴翰^{フテガミ}、今日此京へ届キ拜見シマシタ。松木、太田へ手紙ヲ送り給ハリタレド
モ、未ダ其返答参イラヌ由シ。太田ハ君ノ手紙ヲ見テ、直ニ返答シタレトモ飛脚 post ノ間違ニ
テ、届カヌコト、思フ。……。日本人へ君ノ伝言ハ一々之ヲ伝ヘタリ。私ドモハ日々君ノコトヲ
話シ、忘ルコトナシ。実ニ欧羅巴中唯一人ノ良友 good friend ト思ヘリ⁽³⁶⁾ (傍点引用者)。」

こうして深い信愛の情を残しながら、一行はフランスを去って、つぎの訪問地リスボンに赴くわ
けであるが、このとき、日本使節にとって、まことに不快な事が起こった。それは、一行を送るフ
ランス側の対応がきわめて冷淡で、威嚇とも思われるほどものものしく、武装した兵士の警戒する
なかを、パリから到着した列車から降りたあと、直ちに徒歩でロシュフォールの港まで行かなけれ
ばならなかったことである。『西航記』閏八月十三日のところに、以下のように記されている。

「朝第八時ロシファルトに着。ロシファルトは巴里より九十里(仏里法)に在る仏蘭西の海軍
港なり。車より下り船に乗るまでの路十町餘、此間盛に護衛の兵卒千餘人を列せり。敬禮を表す
るに似て或は威を示すなり。日本人は昨夜火輪車に乗り、車中安眠するを得ず大に疲れたるに、
此所に着して暫時も休息せしめず火輪車より下り直に又船に乗らしむ」⁽³⁷⁾。

この記述は、『福翁自伝』にも引用され、忘れられない強い印象をあたえられたが、この原因に

(34) 『福澤諭吉書簡集』19頁。

(35) 『福澤諭吉全集』第十九卷、43頁。

(36) 「ペテルスブルクにて」、ロニ宛、文久二年七月二十一日(1862年8月16日)、前掲『書簡集』22-23頁。

(37) 『西航記』、『全集』第十九卷、53頁。

ついで福沢は『自伝』のなかで、薩摩侯の家来が、英国人リチャードソンおよびそのほかの人々を斬った生麦事件の報道が、ヨーロッパに届いた影響だとしている。しかし今日ではそれは間違いで、第二次東禅寺事件、すなわち英国公使館の護衛にあっていた信州松本藩士が、五月二九日（西暦六月二十六日）代理公使ニールを襲撃したというニュースが、八月十四日フランス政府に伝えられたため、フランス側は硬化し、従来態度を一変させたものであると考えられている⁽³⁸⁾。この事実を裏づけるものとして、ロニは福沢たちにこの事件の真相について知らせてくれたもので、福沢は、文久二年閏八月二十七日（1862年10月20日）ロニ宛に感謝の手紙を書いている。そのなかで、福沢は、「この興味深いニュースが、フランスで書かれていて、理解することができないので、英語に翻訳していただけると有難い」とのべているのは、当時の反訳方の語学力を窺わせる一節である（‘The interesting news from Japan stated in your letter I have read with much thanks for your troubles, now I wish you will be so kind in the future also translate with the English language and send them to me, because, you know I am not able yet to read the French ……’⁽³⁹⁾）。

遣欧使節の一員としての参加により、福沢は、ヨーロッパの理解について、その文明のみならず、そこに住む人々との生活体験の共有を通じて、ますます深まった。その意味でロニは、重要な媒介となったといえるであろう。

『西洋事情』、『学問のすゝめ』そして『文明論概略』などの著作を通じて、幕末および明治初年にかけて、啓蒙思想家としての名声をたかめ、文明批評家としての地位を確立した福沢諭吉は、その周辺に多くの知識人をひきつけ、また彼自身、稀代の教育者としてその門下生から多くの教養人を輩出させた。彼が同時代人として交わった人々の多くは、いわゆる尊王攘夷派の人々ではなく、幕府側ないし幕藩体制を支えた要路の人々であった。

書簡を通じてみたこれらの教養人のうち、もっとも親しい関係を結んだと思われる人々は、同世代人としては、桂川甫周、大童信太夫（黒川剛）、島津祐太郎（復生）、大槻磐溪、九鬼隆義および福住正兄（九藏）等であろう。福沢と親交があった人々が、圧倒的に幕府関係者、旧幕臣あるいは佐幕諸藩の出身であったのは、彼が幕臣として禄を喰み、幕府に親近感をもっていたからであるが、同時に薩摩・長州を中心とする勤王の諸藩には、福沢と志を共にする洋学者、思想家が少なかったことにもよっている。後に登場する土佐の俊才、馬場辰猪の如きも福沢門下生としてであって、たとえば明治維新の「影の立役者」ともいべき坂本龍馬の如きも、福沢とは面識がなかったと思われる⁽⁴⁰⁾。

「門閥制度は親のかたき」と喝破した諭吉ではあったが、洋学研究に好意を寄せる藩の上士にたいしては、終始交わりを厚くし、慇懃な態度をもって接した。島津祐太郎^{すけたろう}は、そのひとりである。

(38) 芳賀 徹『大君の使節——幕末日本人の西欧体験』中公新書、1979年、195-6頁、をみよ。

(39) 前掲『書簡集』26-27頁。

文久二（1862）年五月九日（旧暦では四月十一日）ロンドンから出した手紙のうち島津宛の書簡のほかに、この旅行中に中津藩士に宛てたものとしては、今泉郡司および古田権次郎のものがあり、さらに中津藩とは関係なく、福沢が咸臨丸での渡米の折に仕えた木村撰津守喜毅の用人大橋栄次宛のものがみられる。

もっとも注目すべきものは、島津祐太郎宛ての書簡で、当時、満二七歳を迎えて血気盛んな福沢の心境をよくあらわしている文面である。

「小生儀も今般ハ幸ニ西航之員ニ加はり、^{ふたたびえべからず}不可再得之好機會。右ニ付旅行中学術研究ハ勿論、其他欧羅巴諸州之事情風習も探索^{いたすべきころえ}可致心得ニテ、^す已ニ佛英兩國ニても諸方に知己を求メ、国之制度、海陸軍之規則、貢税之取立方等承糺し、一見瞭然と申へは参りかたく候得共、此まで書物上ニて取調候トハ、^{いつげんにしかず}百聞不若一見之訳ニて、大ニ益を得候事も多く御座候」。

このように決意をのべたあと、中津藩の旧態依然たる様について、「右ハ、私在府中、彦三殿始知己之人へは議論いたし候ことも御座候得共、多年姑息之風習俄に難^{あらためたく}改、徒に空論ニ属し申し候」。要するに藩の諸制度について、岡見彦三等と議論したが、改革は一向に進まず、肥前鍋島藩などにおくれをとるのではないかと憂慮していることが、つぎの文章から察せられる。

肥前侯杯^{など}ハ疾く其御見込有之義と相見へ、此度も家来三人、医者、砲術家、蘭学者、使節従僕へ御頼込相成、全く欧羅巴諸州実地研究之為メと被存候。

肥前侯鍋島閑叟は、早くから英明の君主として知られ、軍事をはじめ制度文物の西洋化に熱心で、このことに注目した福沢は、藩の上司島津祐太郎にたいし改革に立ちおくれまいように訴えている。外国の研究は自分ひとりでは到底達し難く、いまはともかく洋書をできるだけ多く買い集めることが肝要であると、つぎのように続ける。

「……右に付先ツ洋法を採用するにハ、実地之探索ハ勿論候得共、迎も老人ニて僅之時日に尽しかたく、後は書籍取入レ候より外手段無之、既に当府ロンドンニて、英書も大分相調候得共、尙又和蘭え参候ハ、十分に買取候積ニ御座候。江戸ニて頂戴仕候御手当金ハ、⁽⁴¹⁾不残書物相調、玩物一品も持帰さる覚悟ニ御座候。」

(40) ジャンセンは、つぎのように書いている。「この時代の著作を読むと、そこにしみとおっている西洋の威力や模範の影響の深さに一驚しないではいられない。福沢の有名な小著『西洋事情』は、何十万部と発行されほとんど時代の教科書というに近かった。その影響は、佐々木や中岡にも見られたし、啓蒙の必要がある公卿（たとえば姉小路や岩倉）にこの本を贈り物にした例もある…。」（Marius Jansen, Sakamoto Ryoma and the Meiji Restoration, 1961, Princeton, 平尾道雄・浜田亀吉訳『明治維新と坂本龍馬』1982年、時事通信社、365頁）。

龍馬にたいして、『西洋事情』が与えた影響は明らかではない。だが、彼の非業の死は、1867（慶応三）年12月10日の夜、その寝室で中岡慎太郎とともに、刺客に襲われた結果であった。とすれば、前年に出版されて評判となった『西洋事情』から、何か有益な示唆をうけたこともありえないことではない。

後に福沢は『自伝』において当時を回想し、「只日本を出る時に尋常一様の旅装をした丈で、其当時は物価の安い時だから何もそんなに金の要る訳がない。其余った金は皆携へて行て龍動に逗留中、外に買物もない、唯英書ばかりを買て来た……」とのべているのと符合する。

だが近代化のテンポの遅いのに焦慮する福沢にとって、日本国全体のことではなく、実に中津藩が念頭にあったことは興味深い。中津藩では当時、医学所設立の動きがあったらしく、これについては帰国の後、辞書、究理書、医学書、その他砲術書なども備えつける用意があることを示唆しつつ、以下のようにその決意を披瀝している。

「い才之儀ハ帰府之上建白も可仕候得共、先ツ当今之急務ハ富国強兵に御坐候。此まで御属敷ニて、人物を引立には漢籍を讀を先務と致来候得共、漢籍も讀様ニて実地ニ施し用をなし不申。⁽⁴²⁾
……」

ここで「富国強兵」を主張しているのは、当時、文久二（1862）年の段階で、福沢の日本の将来にたいする展望は、幕府主導の統一国家、「大君のモナルキ——徳川家中心の連邦国家——」に集中しており、各藩も、それぞれ独立に近代化の途を模索していたという事情に照応する。そこで幕藩体制のあり方に、次第に疑問を感じつつあった武士層のうち、仙台藩士、大童信太夫^{おおわらしんたいう}は、福沢が親交を結んだ人として、傑出した人物のひとりであったことが、書簡から窺われる。

大童は、仙台藩の江戸留守居役を務めた人物で、幕末維新の動乱の際、佐幕派に与したため藩内で孤立し、家老^{ただき}但木土佐が責任をとって切腹したのち、彼を助けた大童信太夫は一時、朝敵とされた。変名して難を逃れようとさえした大童と親しい関係にあった福沢は、終始一貫彼を支持して窮地を脱するのに協力した。この経緯は、『福翁自伝』にくわしく物語られている。⁽⁴³⁾

福沢は仙台藩との関係では、大童の前にすでに碩学として知られた大槻磐溪とも親しかった。彼は高名な儒学者であったが、幕府の排外主義を批判していた。おそらく大童も大槻の影響を受けたことも考えられる。福沢は、大童が藩主の名代として日光、東照宮への参拝に赴くにあたり、慶応元年四月十日、簡単な書簡をおくっているが、それから明治三年閏十月十日の最後の書簡まで、十六通に達する。その交際の深さが察せられるであろう。

慶応三（1867）年十月、土佐藩は、幕府へ大政奉還を建白、同時にこの頃、薩摩および長州の両藩にたいして討幕の密勅が下され、こうした情勢を背景に、十月二四日、徳川慶喜は將軍職の辞職を表明、複雑な国際情勢とも絡んで、日本は物情騒然たる事態に立ち至った。そして翌慶応四年、鳥羽・伏見の戦、いわゆる戊辰戦争がおり、絶望的な戦況をみて慶喜は大坂城を脱出し、海路江戸へ帰還した。このような情勢のなかで、慶応四年一月十五日、新政府は王政復古を宣言、各国に

(41) 島津祐太郎宛、文久二年四月十一日（1862年5月9日）。『書簡集』第一巻、12-14頁。

(42) 前掲、島津祐太郎宛書簡、前掲、『書簡集』14頁。

(43) 『福翁自伝』、『全集』第七巻、191-194頁。

通告した。三月十三日、西郷隆盛と勝海舟との会見の結果、江戸城は無血開城となり、慶喜は、水戸へ退去した。

以上は幕府倒壊前後の主要な歴史的事件の経過であるが、当時、維新政府の威令は全国に及ばず、五月三日、奥羽越列藩同盟が成立し、東北諸藩は会津藩を中心に仙台藩をはじめ、新政府にたいし抵抗の姿勢を示した。やがて五月十五日、上野での彰義隊の敗北によって、この同盟の内部に変化が生じ、仙台藩でも藩論が佐幕派と勤王派の二つに分かれて微妙に意見が対立したが、大童信太夫は佐幕派として終始した。

すでにふれたように、最初の大童宛書簡は慶応元年四月十日であるが、この頃、福沢は仙台藩のために砲術書や、横浜で出版されていた新聞の翻訳を請け負っていた。慶応元年閏五月十三日の書簡では、「将日外御話申上候横浜新聞之義、思召も被為有候趣、何卒御施行奉祈候」とあり、つづいて近いうち福沢宅での面談の折に、翻訳についての相談をしたい旨の文面がある。『横浜新聞』は、イギリス人ハンサート (A.W. Hansard) が、文久元 (1861) 年、横浜で創刊した最初の英字新聞 (The Japan Herald) のことで、大童が購入したこの新聞の翻訳を、福沢がひきうけることを承諾した文章である。

江戸留守居役としての重責を担っていた大童は、おしよせる外国勢力の情報を集めるべく、福沢と親しい関係になったと考えられる。慶応元年九月二十九日付、大童宛書簡には、「昨夕新聞紙御廻し相成一読仕候処、此度ハ大分^{くわ}委しき記載御座候ニ付、夜前翻訳仕、……明日は次之^{ママ}出版日に御座候。此節柄之義、^{あいなるべくば}可相成ハ速に翻訳致度……」とのべられている。「此節柄……」とは、時局の重大性を思わせる表現で、前年の四ヶ国の連合艦隊や下関砲撃事件や第一次征長戦争をさすと思われるが、ここで福沢が訳出を急いだというのは、解説によれば、第一九四号 (1865年11月11日——慶応元年九月二十三日号) であったという。

福沢によるこの新聞の邦訳は、「幕末英字新聞譯稿」として、『全集』第七巻に収められているが、この時期の重大ニュースを報道したものである。つぎのように伝えている。

「外国ミニストル種々の見込を以て大阪に赴たるは今日に至て明白なり。ミニストル等は大阪歟、或は某近傍大君^{あんざいしよ}の行在所に於て集会を爲し、大君^{いよいよ}の彌以て江戸を去りミカドの居處なる京都近傍に在城を定る哉否を聞糺すべし。又償金のことを談判すべし。又新に開港のことを云出すべし。又長門一件の難事を落着せしむる歟、或は落着せしむることを試むべし。又輸出輸入の品物を盡く五分税になすべきことを求むべし。又陰然たる権威ありて見るべからざる日本国王たるミカドのことに付、明白に之を聞糺すべし。○余輩の推察する如く、大君と諸外国と取結たる條約には、元來、ミカドの保證を附すること要用なるに、此まで其保證なきの故を以て、⁽⁴⁴⁾寛大懇親の交際を妨たること明白とならば、ミニストル等は此保證を得る爲め力を盡すべし」。

(44) 福沢諭吉、「幕末英字新聞譯稿」『全集』第七巻、517頁。

この一節には当時緊急な問題となっていたイギリス艦五隻、オランダ艦一隻、フランス艦三隻、計九隻を以てする条約諸国の連合艦隊の神戸到着（十一月一日）の意義が、明白に物語られている。⁴⁵⁾ この新聞を読んだ大童が、時局の重大性をあらためて認識させられ、佐幕の意志をますます堅めたとも考えられる。しかし数年経って事態は切迫し、戊辰戦争が勃発して、上野の山で彰義隊が敗北するという重大な局面を迎えて、佐幕派の大童は憂慮し、福沢に事態の推移を訊ねたらしい。上野の山の戦争の最中、まさに福沢が「この塾のあらん限り大日本は世界の文明国である。世間に頓着するな」と激励した翌日の慶応四年五月十六日の大童宛の書簡は、緊迫した戦闘の有様を描写して興味深い。

「先刻は御紙面被下候処、生憎他出中、貴答不仕、失敬御免可被下候。扱昨日の一条何分^{たしか}慥に不相分。法王は昨暁未だ事の始らざる前既に御立退き、山内既に空かりし趣、且只今或る百姓の話に、昨夜は三河島村之御止宿相成候よし、慥に相話候⁽⁴⁶⁾。

法王とは、輪王寺宮（のちの白川宮能久親王）のことで、慶応三年五月に輪王寺門主となった。注目すべきことは、この時点では、戦況が幕府側と朝廷方のいずれに有利であったかは正確にはわからず、福沢も情報の把握に苦勞している様子がかがわれる。

「戦争の模様、午前頃迄は彰義隊十分の勝利にて、薩長因備死人^{おびただしく}夥^{おびただしく}敷有之、午後に至り湯島天神坂上より長人大砲を打落し、之が為め彰義の人も困却のよし。」

当然のことながら、戦闘の翌日では、勝敗の帰趨が判然としないのは理解できる。はじめ奥羽列藩同盟の主役として、会津藩を擁して薩長軍を迎え撃つはずであった仙台藩の内部で、意見の対立が激しくなった。その結果、藩論を制した勢力は、朝廷にたいする賊軍となることをおそれ、薩長軍に降った。そこで佐幕派の頭目とされた大童信太夫と松倉恂は、追われる立場となった。大童と親交のあった福沢はこれに同情し、仙台藩主伊達宗敬を説得して赦免の了解をとりつけ、さらに藩の大参事からも諒承をうけた後、大童らが自訴すれば八十日間の禁固で赦免するという政府の内意を聞き出した。そこで福沢は、大童、松倉、熱海貞爾の三名に同行して日比谷の仙台屋敷に出頭、彼らは、謹慎の上、釈放された。この事情は、『福翁自伝』にくわしく物語られているところである。⁽⁴⁷⁾ 明治三年閏十月十日の熱海貞爾宛書簡には、このことについて、

「右之次第ニ付、此趣御両君（この場合、大童信太夫〔変名黒川剛〕および松倉恂を指す…引用者注）へ御通し被下、兎も角も明日御決断被下、出ざるならハ明日相談を極メ、明後朝出掛可申。出掛候上ハ、即刻伺書を出し、本人えハ長屋をかし、一兩日弁官の御下ケ札を待つなり。此段急速申上候。以上。」⁽⁴⁸⁾

(45) この間の事情については、拙著『英国外交官の見た幕末日本』吉川弘文館、1995年、をみよ。

(46) 大童信太夫宛、慶応四年五月十六日、前掲『書簡集』96-97頁。

(47) 『全集』第七巻、191-194頁。

(48) 熱海貞爾宛、明治三年閏十月十日、『書簡集』180頁。

だが留意すべきことは、大童等が仙台藩から犯罪者として追われているときの数年間、福沢が示した友情であろう。

「僕案スルニ、諸君必ス御窮迫ならん。此度之条約成るに至れハ。^{とりあえず}不取敢三、五拾金ハ得べし。弥^{いよいよ}以都合宜敷候得ば、百も貳百も取るべし。何卒御相談被成、思召御座候ハ、拙宅まで一寸御出被下度、御相談仕度奉存候。人事不如意も長^{ながき}にあらず、青天白日期して可待。人生唯一片之誠心あるのミ。⁽⁴⁹⁾頓首。」

亡命者にもひとしい生活を余儀なくされている二人にたいして、蘭書の翻訳をすすめて何とか生計の途をたてさせようとしている福沢の苦心を思わせる文章である。

福沢は、慶応三年、二度目の遣米使節の通弁として渡米の折、和歌山および仙台藩から、鉄砲をはじめ武器の購入を依頼された。しかし独自の判断から、銃器の代わりに預かった貳千五百両の金で大量の書籍を購入した。このことについては、福沢と大童との間に了解があったものと考えられている。そのうち残金一〇四九両三分拾四匁は、仙台藩に返済している。⁽⁵⁰⁾

洋学に関心を抱き、親交を結んだ人として、大童信太夫とならんで、九鬼隆義もまた中津とは関係がないにもかかわらず、福沢の心をとらえた同時代人であった。福沢は、蕃書調所において^{きん}三田藩士の蘭学者川本幸民と知り合い、これが契機となって三田藩主九鬼隆義と親しい関係となった。九鬼は、早くから藩の近代化に熱心で、政府に先んじて廃刀令を主張し、またキリスト教会を助けるなど、福沢と意見を同じくする点が多かった。廃藩置県までの時期、九鬼とその重臣白洲退蔵らは、西洋文明の導入のために洋学校の設立を考えていたという。福沢はこの計画に希望を抱き、同時に九鬼も丸善に洋書を注文するなどをして、利害関係からしても密接なものになろうとしていた。

「御帰国益御盛被爲入、近日は洋学校御取建之思召も被爲在、就ては、外国之書籍御注文之義、取計可申旨承知仕候。……都下も相替候義無御座、私方ハ唯讀書而已ニて、世の新聞も耳⁽⁵¹⁾入不申。文明開化ハ中々程遠き事と奉存候。」

この時代は、維新政府の前途がどのようなものになるか、場合によっては、倒幕時代の攘夷政権が出現するかもしれない、一種疑心暗鬼の心境にあった福沢が、ひたすら洋学研究を推し進めることによって日本の近代化をはかろうとした。そのためには洋学校の設立とならんで、初等教育の充実などの重要性を九鬼に訴えていることに注目しよう。

「世の文明よりも一身の文明専一と存じ、他は顧るニ暇あらず候。洋学校御取建相成候ハ、治人の君子を御引立相成候より、爲^{ひとにおきめらる}人治の小人を導き候よふ、御注意被遊度。」^{あそびされたし}

人を治めるための君子を育てる洋学教育も勿論であるが、それよりも治められる普通の人々の教育

(49) 黒川剛・熱海貞爾宛、明治二年十月二十八日、『著作集』146頁以下。

(50) 大童信太夫宛、慶応四年三月十三日、〔参考〕大童信太夫宛福沢論吉覚書、『書簡集』88-90頁。

(51) 九鬼隆義宛、明治二年十一月六日、『書簡集』149-150頁。

こそ、重要であることを訴えているのである。三田藩では、慶応年間に、藩校の科目に洋書の講義を加え、藩士のための英語学校が開かれていた。

福沢の要請に応じて、三田藩では、明治二年に刊行された『世界国盡』を買い入れ、学校教育用として採用したようである。しかしながら、明治四年、廃藩置県の制度化に伴い、三田藩は三田県となり、十一月兵庫県に合併された。九鬼隆義は、明治五年十一月、神戸に移住し、福沢との交友はその後も続くが、藩を単位する教育は、国家主体のいわゆる義務教育の時代に入り、明治五年、福沢の『学問のすゝめ』の出現によって、国民教育の教科書としての役割が、福沢の著書に課せられることとなった。

福沢の適塾以来、志を同じくした人々を中心に、彼らに宛てられた書簡を通じて、その思想と行動を考察した。版籍奉還、廃藩置県をはじめとして、近代国家への途を歩みはじめた明治国家の動向を凝視していた福沢はいまや、「ヨーロッパ文明の紹介および導入」を事業とする啓蒙思想家から、「近代国家日本」を目指す文明批評家としての地位に到達した。

以上、安政年間から明治初年にかけて、福沢がともに学びともに助け合った友人、知己にたいする書簡を通じて、幕末・維新の時期に活躍した知識人の思想と行動について考察した。これによりわれわれは幕末から維新にかけての揺れ動く社会の実相に、一層深く触れることができたように思う。だがここで活動した人々は、いわば「天保の老人たち」といわれる世代であり、幕末動乱の息づまる時代をかけ抜けて、明治の新時代を迎えた人々であった。

福沢はもちろん幕末、青年時代をへて、明治初年壮年期に入った人々は、明治の変革を積極的に評価し、曲がりなりにもそこに自分たちの目標の実現を期待することができた。しかし、一世代おくれで嘉永および安政年間に生まれ、維新の時期に成年を迎えた人々は、はげしく流入するヨーロッパからの新しい制度文物の移入の影響もあり、新生日本のいちじるしい立ちおくれを感ずるに至った。その結果、世代間の思想的、体験的断絶は深まり、封建体制の崩壊にともなう不平武士層の叛乱が各地に頻発するとともに、他方、「維新のやり直し」を呼号し、急進的な思想を唱えて組織的な運動が活発となった。明治十年代の自由民権運動は、理論としては福沢に代表される「天保の老人たち」の影響を色濃くうけながら、しかしこれらの先輩たちとは一線を画するより若い世代の人々、馬場辰猪、小野梓、中江兆民そして植木枝盛や大井憲太郎らによって担われるのである。明治十年以後の福沢諭吉の書簡は、このようないわゆる「獅子の時代」の若人たちの活動を活写している。

(名誉教授)